

2019 年度 総合研究所特別研究員 研究活動報告

氏名	村田 真一
研究テーマ	〈異国神〉としての八幡神——中世神話の展開
研究概要	八幡神は、古代において朝鮮半島から渡来した神を核心として新たに成立した神であったと考えられ、『記』『紀』を代表とするいわゆる古代神話には属さない。しかし、中世においては多くの顕現伝承が作り出されており、中でも、八幡神が異国から到来し「日本の神」となるという特徴が、構成や要素を異にする複数の顕現伝承に広く認められる。本研究では、こうした〈異国神〉としての八幡神をあらゆる顕現伝承を中世神話という観点から分析し具体的な様相を明らかにしつつ、その神仏信仰史における意義を論じる。

1. 研究活動の概要と研究成果	<p>中世には、八幡神が顕現に際して「はじめて日本の神になった」との言葉を発したとされるようになる。すなわち、中世においては顕現以前の八幡神は「日本の神」ではないという認識があった。たとえば、正和2年(1313)成立『八幡宇佐宮御託宣集』(以下『託宣集』)にはこの種の顕現記事等が複数記載されている。そこで、「異国に出自して現在は日本に顕現し祭祀されている神」を「異国神」として捉えることとし、それが『託宣集』において八幡神の「中世神話」をどのようにあらわすのかを考察した。『託宣集』では、総じて、八幡神は「日本」の守護神となると同時に末法辺土「日本」の衆生を救済するべく顕現した。その本源は、仏教の世界認識における全ての存在界(十界)で無際限に衆生を救済するものだが、無差別的な救済活動に対して個別地域「日本」の守護と救済を担う起源はかつて応神天皇であったことにある。ただし、応神と八幡の間はいまだ「日本の神」ではなく、仏教世界の中でも天竺・震旦・本朝、いわゆる三国世界で菩薩として救済—修行していたという。以上のような『託宣集』の「中世神話」は、とくに衆生救済の神としての八幡神の存在の来たし方、起源を積極的に「異国」に求めるものと言え、中世における仏教を基盤とした信仰世界の在り方をあらわし出すものと位置づけられるだろう。ただし、「異国神」である八幡神が「日本」を格別に守護するには、異国から渡り来ることの上に、応神天皇を介して「日本」と縁を結ぶ必要があった。『託宣集』の八幡神において「異国神」であることが主張されているのは、その仏教的救済の普遍性を説くと同時に、なぜ八幡神が「日本の神」としての国家守護を遂行するのかという問題を逆説的に強く意識させるのである。</p>
2. 学術論文・学会発表等	<p>「八幡神の殺生と利生—『八幡愚童訓』甲本から乙本「放生会事」へ—」『伝承文学研究』68、伝承文学研究会(2019年8月)</p>
3. 今後の課題	<p>古代から中世にかけて展開する八幡信仰をめぐる種々の言説が創出される様相と意義の解明。とくに平安時代の八幡信仰史における衆生救済や国家守護、および応神天皇同体説の関係について。</p>